

バブルは登山の再生を助けるか？

OWCC 中川和道 climber-nak@bca.bai.ne.jp

ソーシャル・バブル¹⁾という言葉をご存じだろうか？人類は過去に何世紀も、特効薬もワクチンもない状況の中で感染症に対抗してきた。その中で編み出した小さなグループ(固い結束の『となり組』パンデミック版か？)を「バブル」というのだそうだ。その効果を学術雑誌ネイチャー6月号がコンピューターシミュレーションで検証し、相応の成果を見出した。5月頃からMITテクノロジーレビューなど^{2,3)}が何度も取上げてきた。至近の例は、農水省の4人会食指針⁴⁾や、11/8の体操国際競技会⁵⁾だ。そのソーシャル・バブルの理論を、登山活動に応用しようと考えた先駆者がおられる。本人にはお尋ねしていないのだが大城和恵先生の20201031ご講演⁶⁾やHP⁷⁾は、その先駆例だと思う。

応用の前提は「緊急事態宣言が解除された。ワクチン・治療薬はまだない」だ。

中川の自己解釈で内容をまとめる。(0)最も身近な行動単位は家族だ。だからコロナ自粛(緊急事態宣言)が明けた後に「登山の再開はまず家族単位から」と言われた。今回の行動単位はもう一歩進んで、緊急事態宣言が明けたあとの、STEP2「新しい少人数グループ」である。これを中川は勝手に「山行バブル」とここでは呼ぶことにする。大城先生のご承諾は得ていない。以下の提案にそって登山を行った場合の事故について、大城先生、中川ともに責任を負わない。自己責任で行動していただきたい。

大城先生のルール⁶⁾を(間違っているかも?)適用すると、(1)バブルの人数は当面4名で固定する、(2)同じ会などすでにつながりがあること、(3)講習会などの場合は、室内実技や座学などと山行を同じメンバーとする、(4)この行動単位の中でのみ資材装備を共有する、(5)複数のバブルが同時に登山することは可能だが、バブル間の交流や資材装備の共有は行わない、(6)緊急時(身体生命に危険が及ぶ場合)には適切な感染防止対策をとったうえで、バブルどうしの支援を許容し得る、(7)単位メンバーを変更する場合は、最後の山行から2週間経過後に行う。

さてこれを我々にどう具体化していこうか？(a)ピークハント・縦走・一般登山の場合、4名は妥当な数だ。(b)クライミングではどうかと考えた中川の案は「3名バブル」

だ。(c)大きなパーティーや登山学校はバブル1、バブル2、バブル3などの合同パーティーで作る。さらに上記(1)~(7)の考え方を適用すれば、一応の形式は整う。

以上が中川の勝手な聞き取りである。さらに考えてみよう。農水省の会食指針が「4人」という理由は、罹患確率が下がるからだけではない。大城先生の10/31ご講演では違った表現だったが、「感染経路の追跡の正確さを上げるため」である。すなわち、今や、誰もが感染するし、誰もが感染を広げるのだ。山岳事故と一緒に、まさしく「明日は我が身」だ。自分が感染したら直ちに経路調査に協力し、抑え込む準備を、バブルによって登山界全体が共有しようね、と言っているように、中川は思う。

「3名バブル」「4名バブル」の間は、きちんと体温を測り体調を管理しよう。もし事故を起こしたら、救助隊の方に「私の平熱は36℃です。コロナの症状はこの6日間ありません」とはっきり言えるのが、withコロナ時代の登山ではなかろうか。体温の管理などをしない人が、もし、いたら、その人には「ザイルを組みたくない」と中川は必ず言う。体調の自己管理を前提とした登山をやりたいのだが、いかがだろうか？

¹⁾MITテクノロジーレビュー、「社会復帰への第一歩「バブル生活」」、2020.05.25。

²⁾MITテクノロジーレビュー、「社会的バブル」戦略、2020.06.28。

³⁾Forbes ソーシャルバブル大事に、2020.09.13。

⁴⁾井戸知事「GoTo 4人に」、神戸新聞 2020.11.17。

⁵⁾朝日新聞 論座 20201112 増島みどり

⁶⁾大城和恵「登山の新型コロナウイルス感染防止対策」、登山研安全登山サテライトセミナー(兵庫)、2020年10月31日-11月1日。

⁷⁾山岳医療救助機構「revised.登山再開に向けた知識(登山実践編)ver.2」 https://sangakui.jp/data/wp-content/uploads/tozan_knowledge_practical_ver2s.pdf

A. 復習 新型コロナの特徴

無症状でも広めてしまう、誰でも 個人が悪いんじゃない

知らないうちに広めてしまうから、

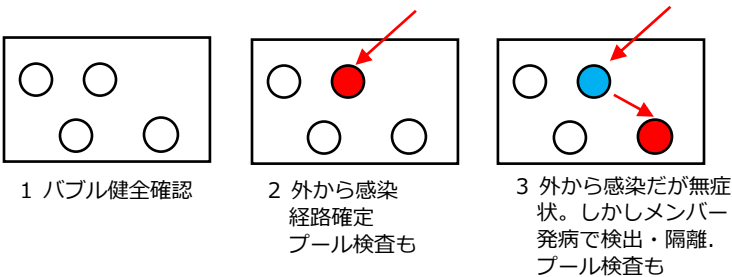


感染 ↓ ↓ ↓	動物-人 に变异 散	人-人感染 アフリカから 第2類感染症	飛沫感染が主 エベレスト BC まで速 日本の山：まだ実例なし	約7日毎 BCまで速 拡
ウイルス 排出開始	症状発現 発熱など 熱中症と混同注意		重症化	
ウイルス 排出開始	無症状のまま 何度も検査して発見治療			
PCR 検査の誤差で検出不可能				

B. ワクチンなし 特効薬なし で どう戦うか？ → 4人バブル案が最有力

昔から人類はこの状況で感染症と戦ってきた

発見・隔離による拡大防止→ 4人バブル案が最有力：2020年6月 ネイチャー
卓球、バドミントンなど世界大会で実験→ノウハウを蓄積 東京五輪まず破綻



通常の公衆衛生・人づきあいの社会では バブルは 4人 が最適。

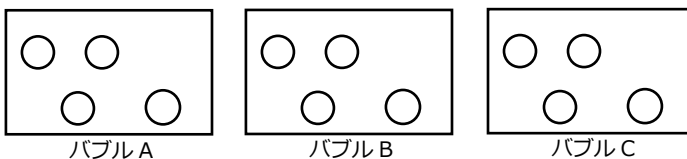
C. 登山への適用先駆者 大城和恵先生たち **山岳医療救助機構** <https://sangakui.jp/>

中川の解釈 10/30

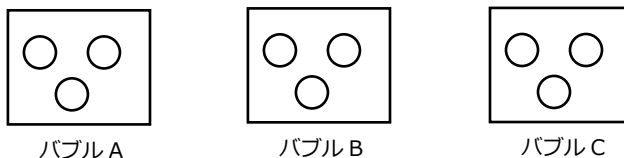
- (1)バブルの人数は当面 4 名で固定する、
- (2) 同じ会などすでにつながりがあること、
- (3)講習会などの場合は、室内実技や座学などと山行を同じメンバーとする、
- (4)この行動単位の中でのみ資材装備を共有する、
- (5)複数のバブルが同時に登山することは可能だが、バブル間の交流や資材装備の共有は行わない、
- (6)緊急時(身体生命に危険が及ぶ場合)には適切な感染防止対策をとったうえで、バブルどうしの支援を許容し得る、
- (7)単位メンバーを変更する場合は、最後の山行から 2 週間経過後に行う。

中川の案：我々はどう具体化していこうか？

- (a)ピークハント・縦走・一般登山の場合、4 名は妥当な数だ。



- (b)クライミングではどうかと考えた中川の案は「3 名バブル」だ。



- (c)大きなパーティーや登山学校はバブル A、バブル B、バブル Cなどの合同パーティーで作る。さらに上記(1)～(7)の考え方を適用すればよい？

山岳医療救助機構 <https://sangakui.jp/> 勉強しましょう

正解はありません。自己責任で試行錯誤を交流しましょう！